令和5年度　生活支援体制整備事業

アンケート調査結果に対しての考察

◯アンケートその1に関する考察

　生きがいや楽しみについて、「なし」という回答が少なからずある。生きがいがないと回答される方の内面や心境はどんなものなのか。

　生きがいを持つことを薦めるだけではなく、お話を聴いて、気持ちに寄り添うような関係づくりやケアが必要かもしれない。

　自宅での暮らしに寄り添い、力づける存在としては、民生委員さんに加え、集落支援員さんがその役割を担っている可能性が高いのではないか。

　相談相手が家族だけであると答えた方が多く半数にのぼる。

　神山町のように行政の人間と住民の距離が近いと（顔見知りであることがしばしばである）、相談がしやすい一方で、プライベートなことはかえって相談しづらいという状況が生まれてしまっていることにも触れておかなければならないだろう。

※関係性が近いが故に言えない（遠慮してしまう）なども実際にある。今回のアンケート調査でも若い世代（20代～40代）の移住者の方が半分いる中で行ったが、皆さん好意的に受け入れてくださり、答えてくださったという反応が多かった。

　必要な支援やサービスについて

　・獣害対策　・山水等の水道問題　・最後まで自宅で暮らすための医療支援

　・買い物支援　・移動支援　・どんなサービスがあるのかわからない

　等の回答が上がった。

　最後まで自宅で暮らすための支援は、これからますます求められることだと思われる。包括的なケアが行われるまちづくりが行われるよう、横断的にスクラムを組む必要があるだろう。

◯アンケートその2に関する考察

A. 移動に関する考察

▶運用に関して

　4月からの運用で、利用率が4割を超えているというのは、多くの町民の方に有効に利用していただいていると思われる。移動に困っておられた方がかなりの数にのぼっていたことも示唆している。

▶利用に関して

　利用していない方の中には、「安すぎるから申し訳ない」、「利用距離が短くて、利用することを遠慮してしまう」、「タクシーの詰所から自宅までが遠いから迎えにきてもらうのが申し訳ない」等の理由によって利用を遠慮されている方が一定数いるとの報告があり、そのような心情を緩和できるような広報があっても良いのかもしれない。

▶タブレットの利用に関して

　タブレットは、操作に意欲的で動画視聴などを楽しんでおられる方もいる一方で、操作を覚えられない方々も多い。70 歳代の方はスマホを使用されている方も多いので、時を経て世代が変われば、タブレットでの予約も増えるかもしれない。

※調査の際、タブレットが「使われずに放置されている」と聞くことも少なからずあった。意欲があった方でも、使い方がわからず、すぐに聞ける人がいない場合、そこでつまづき、そのまま使えないものになってしまう様子を感じた。

B. 買い物に関する考察

　「買い物に困っている」と答えた方は 7%にとどまった。が、食糧品などの買い物は健康や命に関わることであり、7%は決して見過ごせない数字である。町内のお店は町内で暮らしが完結している方達にとって最重要であることは言うまでもないが、買い物に困っていると答えた 7%の方達を支えるものが、宅配や移動販売であると考えると、宅配や移動販売の情報を困っている方へいかにして伝えるか今一度検討する必要がある。

　一方、地元で行われている弁当の宅配や商店による配達などは利用者の少ないこともあってか、まだあまり知られておらず、周知の余地があるのかもしれない。

　しかし商店への聞き取りによると、商店による宅配等はマンパワーも限られているため、あまり利用者が増えると対応できず、周知されていないという事実もある。

　家族が買ってきてくれる場合はおそらく「困っていない」に分類されている。が、買い物には選ぶ楽しみ、購買の喜びがあり、自分の目で見て商品を選べない場合、買い物に伴う満足度が低下すると思われる。

　同様に宅配や移動販売でも品揃えや自分の手にとって選べるなどの買い物の満足度を確保する工夫が必要であり、「楽しみとしての買い物」という観点を導入することで、買い物を通じて QOL（生活の質）の向上を図ることも可能だと思われる。

C. ゴミ出しに関する考察

家族間やご近所での助け合いが残っていることが見てとれる一方で、一般的な困り事の相談に比べてゴミの困り事においては他者を頼る率がぐんと下がっている。

ゴミは非常にプライベートなものであり、友人や知人などに頼みづらい事情があることがアンケート結果から見てとれる。

ゴミ問題においては公的な支援もしくは民間サービス等がより重要になると考えられる。また、ますます高齢化が進むことを考えれば、おむつ等の回収場所の増設についても検討の余地があるだろう。

D. 草刈りに関する考察

町内においてシルバー人材センターが果たす役割は非常に大きく信頼度や技術力において大変高い水準にあるが、高齢化による人材不足が進んでいる。

今後、草刈りを頼みたいと思う方が増加し、需要に応える人員の不在を招くことが予想される。

「草刈りをしなくても良いのではないか」という 20～40 代の若年世代が増えているという意見があったが、草刈りは、景観を維持することだけではなく、獣害対策や防犯に繋がるなど、神山町の暮らしにおいては欠かせないことであるため、若年世代にその必要性・重要性をどう共有していくかは町の将来に繋がる大変重要な課題である。

費用や技術だけでなく人柄を気になさる方が多いが、業者への依頼の少なさは人柄が分からないことと関係があるのかもしれない。

一方でシルバー人材センターや孫の手プロジェクトは地元の人ならではの安心感があって依頼しやすいのかもしれない。

怪我を心配される方が少なからずいらっしゃる。作業員の安全のための講習の実施や保険の整備の徹底は、依頼者の心配の軽減にも寄与するのかもしれない。

E. その他に関する考察

今のままで十分という回答が多数ある一方で、

・広報物が文字ばかりで読みにくい
・防災無線が聞きづらい
・タブレットが使えない
・高齢になってきて、目が見えにくくなってきているもしくは、理解できないので、直接、伝えてもらえるような方法を考えてほしい
・IP 電話がなくなってしまう不安がある　　などの声があった。

アンケート調査では現状に満足されている住民の方が多いが、具体的に対応しなければならないことも多数出ており、関係各所と情報を共有し改善に努める余地があると思われる。

●総括

　このアンケート調査では、令和5年度生活支援体制整備事業協議体と神山つなぐ公社、神山町地域包括支援センターにて考察を行いました。

　アンケートを実施してみてわかったことは、神山町では高齢者の方々の暮らしを本当にたくさんの方が影に日向に支えているということです。セーフティーネットという言葉のネット（net）は網を意味するが、ご家族の方を筆頭に、隣人、友人、民生委員、シルバー、サロン、デイサービス、行政、商店、移動販売、タクシー会社、病院・・・などの方々が、まさに網目をつむぎ大きなネットを形成し、一人一人の高齢者の方を柔らかに受け止めています。これは都市部の孤立した暮らしでは得難いものであり、神山町が誇るべき風土です。現在、支えられる側にいる高齢者の方々も以前は支える側にいた人たちであり、そのような風土を守ってきた人たちでもあったのです。今後少子高齢化の流れの中で、若年世代がこのネットを形成していかなければならない訳でありますが、新たなテクノロジーの助けも借りながら、かけがえのない風土を神山町が今後も持ち続けていけることを願ってやみません。

　最後になりますが、アンケートにご協力いただいた高齢者の方々、各戸を訪ねアンケート調査に尽力してくださった調査員の方々、そしてこのたびのアンケート調査にご協力いただいた全ての方にこの場をお借りして感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。